

津田昇平教話 第一話

令和三年一月一日 朝の教話

信者は火口のようなものである。いくら金や石がよくても火口が湿っていてもどうしようもない。

おはようございます。新年あけましておめでとございます。令和三年の元日をお迎えすることができました。

内殿で、ご祈念きねんさせて頂いて、神様には旧年中の授けて頂いたおかげの数々を、短い時間で申し上げることはできませんけれども、この尼崎教会にお参りをする氏子うじこ皆に、一人一人の身の上に添って、おかげを、本当にこう、息の差し引き、血の巡りからね、何から何までおかげを授けて下さいましたので、そのお恵み頂いて、お働き頂いてお恵み頂いたことをお礼申さしてもらい、またこの一年間の身の上のことも、ほんとに何から何まで、お世話にならないと一時ときも生きることができないですから、だからほんともう、息の差し引きから、血の巡りから、何から

何まで本当に、お世話になって生きていくことに、私達はなりますから、そのお働き下さること、おかげをお恵み下さることにお礼申し上げながら、今年一年のこともね。お願いというよりも、やっぱり今年のこともまたお礼申し上げて、そして今年一年も、不束ふじゆがなお互いですけれども、少しでも、御神縁ごしんえん頂いている者として、信心してお育てを頂いて、少しでも深まらせて頂いて、神様の御心みこころと私達の心とが、少しでも重なっていくように、一つ心ひとつこころ、神様の心と自分の心とが、重なって一つ心ひとつこころになっていけるように、信心けしんの稽古けいこに、それぞれ、わが身わが一家を練習帳にしながら、参拜さんばい、御祈念ごきねん、御取次おんとりつぎを頂く中で、取り組まして頂きたい。どうぞおかげにして頂けますように、不束ふじゆがな者ですけれども、よろしく

お願い申し上げます、と申し上げました。

御霊前ごれいぜんの方では、そうですね、いつも和太先生かずた、慎治先生しんじ、由幾先生ゆき、

たまの先生みたま、また御霊みたまの多くのね、神々様、また御霊様みたまに対して、ご挨拶あいさつを申し上げます。

このお広前ひろまえで、御用ごようさして頂いてきた初代先生、奥様、二代先生、三代先生には、ほんとにこう、私も共にこのお広前を守らして頂いてきたという思いで、この日をお迎えすることができたということを、共々に喜ばせて頂きたいという思いで、「おめでとーうございます」と。

初代は初代の立場で考えても、子孫に信心を伝えさしてもらおう、また、難儀なんぎな人を取り次ぎ助けるために、命いのちを懸けて御用ごようして下さいまし

た。それは歴代の先生方皆そうですから、そう思うと、今年で百二十四年になるんですかね、尼崎教会は。百二十四年をお迎えすることができ、ここまでおかげを頂いているということは、やっぱり歴代の先生方としても願われてきたことで、でもそれは決して当たり前なことではありません。

まあそう思うと、本当にこの日をお迎えすることができたことを、「おめでとうございませう」と。私も先生方に、初代、二代、三代、初代の奥様に「おめでとうございませう」と申し上げ、また先生方も、私に申し上げます。＊

とは言いますが、今年一年、どのようなことがあるのか分かりませ

んから、例えどのようなことがあったとしても、参って来る氏子の命の拠り所、信心の拠り所ということはすなわち命の拠り所ですから、責任を持って、このお広前を守らせて頂くことができるように、どうぞまた、御霊神様みたまのかみですから、御霊神様としてのお働きを頂いて、こちらの、生きている者の手の届かないところ、行き届かないところ、そういった目に見えないところもお守り頂き、お働き頂いて、氏子の身の上のこと、お広前のこと、教会のこと、在籍の教師のこと、皆含めて、神様にお守り、御霊神様にもお働きを頂いてね。そのためにお徳を積んで下さったはずですから、そのお徳を引き出すのもこちらの信心次第ですから、こちらもしっかりとおすがりしながら、お礼を申し上げながら、お働き頂いて、

その御霊神様と共に、一緒になって、この尼崎教会で今年も御用にお使い頂きたいと、そのようにお願い申し上げる、また確認し合う、そういうご祈念をさして頂くことができました。

「信心する者はどのようなことが起こっても驚いてはならぬ」という教えがありますけどね、今年一年もどういふふうになるのか、それはいよいよ誰にもまだ分からないんですけれども、でも「どのようなことが起こっても驚いてはならぬ」と仰る。教祖様はあの時代ですから、やはり大変な激動の時代だったんでしょうね。時代の移り変わりが激しい時でしたから、そういう中で、拝むことであつたりとか、氏子うぢこのことを思

つてお広前ひろまへ開かれても、お取次とりつぎさしてもらうこと、拜むことも許されな
い状況になったり。それでもそこを通られて、おかげにして頂いて、今日こんにち
まで御道おみちが続いているわけです。

まあまあ、平和といえば平和ですけどねども、でもこの先、何があるや
分かりません。それこそ戦争なんて、もう時間の問題で起こるかもしれ
ないし、大きな地震だっつてすぐに起こるのかもしれないし、何が起こっ
てもおかしくないですね。でも何か起こった時ほど、信心さして頂いて
ると強いな、と思うんですよね。地震であれ戦争であれ、ないに越した
ことはないんです、生きていく上でね。でも、どんなことがあるやもし
れませんか。

せやけど、どんなことが起こって来ても、信心があれば、大きな波でも、神様っていう、こう、まあ杖ですわね。杖をついてると、溺れずにすむ。そういう時ほど、力を発揮する。まあ浮き輪みたいなもんでね。大きな浮き輪で、どんな波が襲って来ても、大きな波で、呑まれるようにして下さると言いますかね。

神様が、こちらがしっかりおすがりしている限りにおいては、神様もその手を放さずに導いて下さるし、祈りながら過あしてもらったら、どんなに大しけであったとしてもね、波が高くて荒れてても、でも「神様、金光大神様こんこうたいじん」とおすがりしたら、ちゃんとその船の向く方に進んでいけば、ちゃんとお守り頂いて、大事なものを守って頂けるなあと思

います。そう思ったら、今年一年どんなことがあったとしてもですよ、でも、楽しみやなあと思うんですよ。信心させて頂いてたらおかげにしてお下さるんであれば、やっぱりありがたいなあと思います。

大変なことが起こってほしいなんて思ってるわけじゃないけれども、でも、起こるんであれば起こるで、驚かずに、そこを信心させて頂いてるもんとしての通り方、同じ津田昇平ただしやうへいでも、信心ない津田昇平さんと、信心頂いてる津田昇平さんやったら、通り方が一緒じゃあ、それじゃあ信心してる意味ないですもんねえ。やっぱり、信心させて頂いてるもんとして、神様にお仕えしてるもんとしての、その通り方をさせて頂きた

い。

わが身が助かるということも大事やし、まあそやけども、こうして神様にお仕えして、お広前預かってるもんしたら、自分のことだけではなく、自分のことよりもって言っても過言じゃないですけど、参って来る人達のことを、神様に助けて頂けるように、何とかこう、教え導いていくことができたらなあと思います。

とは言っても、いよいよ私が信心するわけでもありませんし、おかげの出どころは天地金乃神様てんちかねのかみですし、私が授けられるっちゅうわけではな
いですから、結局、めいめいが、いよいよのところは信心しておかげを
頂いてもらうしかありませんよ。ある程度こちらで、私が信心させても

らう中で、授けてあげられるおかげもあるでしょう。もちろんそれも、神様との繋がりがあから何とかなるわけで、とは言っても、ほんとにかんじんかなめ肝心要のおかげになってきたら、本人が、やっぱり信心する気になって、信心しておかげを頂いてもらうしかないんですよ。

いくら神様、いんこうだいじん金光大神様がお働き下さっても、氏子の側がやっぱり信心する気にならんとおかげになりませんでしょ。

火打ち金、火打ち石、ほくち火口って言ってね、教祖様仰いました。火打ち金、火打ち石、火口。火口っていうのは綿わたみたいなんですけど、左手に石を持って、少しこう指に火口、綿わたみたいなんを握ってですね、で、右手で金をたたくわけですよ、石に向かって。で、たたいたらまあ火の

粉が飛びますから、その火の粉が火口に飛んで、火口に移って燃えて、
で、それを小さな枝とかに持って行くわけですけど。でも、どんなに良
い火打ち石と火打ち金があったとしても、これを教祖様は、天地金乃神
様が火打ち金、金光大神が火打ち石と。どんなに良い火打ち金、火打ち
石があったとしても、火口、つまり氏子の心、氏子の信心、これが湿しめっ
ていたら、どんなに良いものでたたいても、やっぱり火はつかないって
仰ってるんですよね。

「ね、信心頂いてるもんとしたら、やっぱり心にしておかんといかんこ
とですよね。」何で神様、おかげくれはねへんねんやろう。「…」っていうふ
うにして勘繰かんくる前に、疑うたがう前に、そもそも自分自身の心が湿ってはない

んか、神様のおかげを頂けるように、そういう心になっとるんかどうかっていうところは、やっぱり常に意識せんとあきません。

今年は今年のおかげを、やっぱり頂いていかんと立ち行きませんかからね。息の差し引き、血の巡り、手足の動きってよう言いますけど、ほんとにね、何から何までお恵み頂く。でもお恵み頂くというのんも、何んでも恵んで頂けるものもあれば、こちらがしっかり信心せんかったら頂けないおかげがある。で、頂かんと立ち行かんっていうことがある。生きてても、生きてるのが苦しいっていうだけじゃ大変ですから、めべりのお取り払いでそういうところを通る時ももちろんありますけれども、そんな中でも、神様のおかげ、お恵み頂いて、その中で生きていくん

です。そういう生き方を、今年一年も願わして頂いて、お稽古けいこさしてもらう。何度も繰り返して、一日一日、日に日ひに日ひにあらたに、お稽古をさせて頂く。

「稽古とは、一より習い、十を知り」「って、昨日ね、お話をさせてもらいました。「十よりかえる元のその一」ね。その通りで、本当に繰り返して繰り返して、今日一日を、お稽古さして頂いて、神様が授けようとして下さるおかげを、しっかりと、こちらから頂けるようになればなあと思います。

み教えで、

「こんじん てんちかねのかみ金神（天地金乃神）を親と思えば、子と思うぞ。親、
後ろに立っておれば、いかなあくま悪魔が来ても防いでやる
ぞ。また、めいめいに子があつて、親が守りをしてお
つてみよ。子を向こうから棒を持ってたたきかかつて
も、たたかせはすまいがな」

〔理 I 市村光五郎一・六より抜粋〕
いちむらみつごろう

こういうみ教え、教祖様がね、お参りをされた方にお話をされとるわけですけれども、守るものがあると、それがまあ人でも物でも、何でも

一緒にすけれども、大事なものがあって、たたきかかってくるということがあっても、親が後ろに立っていけば、そんなことする人は、普通はいないですよ。子どもがさらわれるなんていう怖いこともありますけれど、そやけども、親が後ろに立ってる中で子を連れ去るなんてことはさすがにないわけです。子ども同士でケンカのようなことがあったり、いじめのようなことがもし仮にあったとしてもですよ、でも、親がついてる中で、わざわざいじめに来るなんてこと、まあそうはないわけですよ。

天地金乃神様っていうのは、人間の親ですから、その親様にしっかりと人間の方が近寄って、すがっていけばですよ。それで、教えでもこ

の一番最初、「天地金乃神を親と思えば」ってあるんです。親と思えば、子と思う。ま、本来的に親と子の関係なのはそうなんだけれども、でも、そうは言っても、やっぱり、親とこち^{した}らの方から思っ^たて、慕^{した}っていかないと、すがっていかないと、親は親としての働きというのができませんよね。

こんなんしてあげたい、あんなんしてあげたい、守ってあげたい、育ててあげたい、必要なことやったら協力してあげたいって思っても、これ、親としての働き、お世話してあげようとかね。でもこれ、してあげようと思っても、子の方から、子は子らしくしてくれんかったら、やっぱり親としての働きをしようにも、したくってもできないですよね。

先にやっぱり、人間として、神様に対して、親とっておすがりする。やっぱりそれがあって初めて、神様が神様として、親神様って言いますが、親神様としてのお働きを下さる。そういう意味じゃあ、人間の方がね、しっかりとおすがりせんといかんといことなんですよね。「人間がかわいいんやったら、ちゃんと助けてや」って、まあそんなですけども、そやけどその分、やっぱり先に神様の方に近づいて、いつも神様神様言うてたら、いつもいつも背中にも、後ろに神様が付いて回って下さってるんでしょ。

そんでないと、いざと言う時に守ってあげたくてもやっぱり届かん。親と生活してたら何かと安心なようでも、でも、一人でウロウロとし始

めて、親は家にいる状態やったら、それは何があっても分からんですわね。そやけど、公園に行こうか、あそこに行こうか、買い物に行こうか、岡山に行こうか言うても、神様っていう親様に付いて来て頂いて、公園に行く、買い物に行く、遊びに行く、車を使って遠くに遠出する、これ、神様にずっと付いて来て頂いて、そしたら、神様をいつでもどこでも何をしても離してませんからね、そしたら、いつでもどこでも何をしても、神様が守って下さる。

「いかな悪魔」悪魔って言葉が出て来ますもんね。教祖様がそういうふうな表現をされたんでしょつかね。教祖様が悪魔と仰ったんかもしれんし、似たようなことをご理解頂いた方が、そういう表現で理解された

か分かりません。そやけど他にも「悪魔」って言葉が、確かにもう一か所くらいあったと思います、教典でね、二か所くらいあったと思うんですよ。だからそう仰ったんでしょね。違う方も残してらっしゃるぐらいですから。

悪魔と言ったらちょっと怖いですけども、要するところまあ、悪い心を持って、魔がさして、そういうめくり深い人が襲ってくる。あるいは、人だけじゃないですわね、出来事、事柄、車が向こうから突っ込んで来るってことだってあるかもしれないし、どんな事件に巻き込まれるやら分からん。つまり、自分の命を傷つけるような、呑み込むようなね、そういう出来事。人やら物やらも含めてね、そういうことが起こって

来ても、難儀なんぎなことが起こって来る時でも、やっぱり神様っていう親様がずっと付いて下さったら、そこを守って下さる。これは、大難だいなんを小難しょうなんにして下さるし、小難は無難ぶなんにして頂くといいこと。で、これだって、結局人間の方が「神様」っておすがりしていかんと、守ってやりたくっても、守ってやれんですよね。やっぱり、あいよかけよですからね。

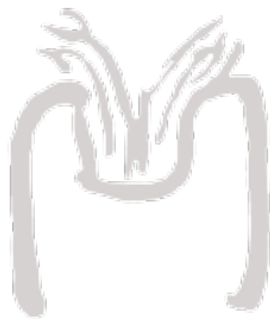
そういったことを思いながら、今日は元日を迎えさしてもらいました。それぞれに今日一日、また新しい一ページをね、新しいまっさらなキャンバスを頂いてますから、それぞれに、一日終わって神様に提出する時に、それぞれ体も心も、いろんな状況、環境、設定があるとは思いますが

けど、そんな中でも、信心して神様のおかげを頂いてね。良い一日に、神様にして頂けるように願いながら、自分でも、良い一日にしていけるような信心のお稽古はらいをさせてもらいたいと思います。よくお参りでした。

(了)

※ 編集者注 5 ページにある、歴代先生方の御霊神様も、親先生（津田昇平先生）に對して、おめでとうございますと「申し上げて下さった」という表現について

親先生にお伺いいたしましたところ、「神からも一礼を申す」という意味で「申し上げて下さった」と表されたとのことでした。「御霊神様からは、さらに深く御礼を申し上げられました。恐縮いたしましたでしたが、恐縮することはなしと神様が仰せになりましたことを覚えています」と、その時、神様、御霊神様と交わされたお言葉をお教え下さいました。（「神からも一礼を申す」については、金光大神御覚書一五・六、お知らせ事覚帳一・七、金光大神賛仰詞を参照）



津田昇平教話 第一話

令和三年一月一日 朝の教話

令和三年四月十九日 初版発行

令和三年八月三十一日 第二版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五
